

## 第9回若山牧水みなかみ紀行短歌大会 一般の部 入賞・入選作品

### 【題 詠】

#### ＜最優秀賞＞

菜の花をなぎ倒してゆく子へさけぶ学校はいい行かなくていい

宮崎県日向市

佐々木 泰三

#### ＜優秀賞＞

菜箸は誰の指より勇敢で湯や油にも拒みはしない

群馬県沼田市

蛸山 恵子

菜の花が咲いたら野原に連れ出してヒョウモンリクガメは陽と婚礼す

茨城県つくば市

松田 早苗

#### ＜特別賞・伊藤一彦選＞

もう全部捨ててしまったはずなのに菜箸だけが君を知ってる

群馬県みなかみ町

どーメキ

若き日に学びし歌の「菜摘ます児」名告るは当り前の世となる

群馬県高崎市

石井 省三

#### ＜特別賞・小島なお選＞

棄てられる野菜でできたクレヨンでスイカ模様にだるま塗ります

千葉県柏市

佐藤 和裕

教室に菜の花和えと残されて眩しいだけの陽を浴びている

神奈川県横浜市

黒川 かおる

#### ＜入選 20 首＞

菜の花は縦に黄色を綴るから右に開いてゆく春の本

群馬県みなかみ町

野本 ゆかこ

ゆでた菜のくすみがすっと抜けてゆく冷たい水はさよならのよう

群馬県みなかみ町

篠原 香代

菜の花のなですと鈴の声聞こえ美しいのみと早口で言う

群馬県片品村

金子 美由紀

今し方摘んだと言いて瑞<sup>じゅん</sup>瑞<sup>さい</sup>しい 蓴菜<sup>じゅんさい</sup>を下げ碁敵のくる

埼玉県所沢市

若山 巖

菜の花の一壺にあまる菜の花忌空ゆく雲の眩しかりけり

東京都町田市

原澤 昇司

小4の看護師役の菜々ちゃんに注射打たれて寝るだけの役

群馬県沼田市

岡本 有未

白菜に青菜、赤蕪、大根と色とりどりの秋に塩振る

宮城県仙台市

角田 正雄

先延ばし癖ある私だけが知る冷蔵庫の菜の花ばたけ

群馬県みなかみ町

山崎 杜人

ごくわづかつくる野菜の畝合ひに子どもを背負ふ精霊蝗虫

大阪府豊能町

熊ノ郷 紀子

菜の花を轟音で鋤くトラクター春を破壊で代謝させてく

長野県松本市

戸来 あい

おかんから831と来るライン今夜もやっぱり野菜スープか

群馬県沼田市

小林 恵美子

品定めされてるような東京でどうぞと出された八宝菜は

群馬県みなかみ町

本多 寿美枝

野菜にも親ガチャありや間引かれた大根葉炒め味はひぶかし

群馬県前橋市

中澤 ひろみ

新米や菜は要らぬという父の大塩むすび眼裏にあり

群馬県みなかみ町

澁谷 典子

分け入りて山菜探す爺二人互ひに熊と間違へ騒ぐ

群馬県前橋市

武藤 洋一

べんとうの片隅にあるひじき煮の最後のひとつの鹿<sup>ひじき</sup>尾<sup>き</sup>菜<sup>き</sup>愛しき

群馬県みなかみ町

吉田 まゆみ

沐浴の温度を測る指先が菜箸のごと水面を揺らす

北海道滝川市

武田 生吹

菜きぎむ厨のすみのラジオ告ぐ石垣島は風力4と

埼玉県羽生市

浅見 邦恵

菜っ葉の菜ではなく奈良の奈なんですけどまあどっちでもいいです

東京都文京区

遠藤 玲奈

七菜の会万葉集を学びたりき有川教授の声を忘れず

群馬県前橋市

山口 タツ子

## 【自由詠】

### ＜最優秀賞＞

お湯になるまで流される水のごと吾ら世代を扱うなかれ

東京都中央区

佐藤 直大

### ＜優秀賞＞

鈴虫と名付けられたる鈴よりも永く大地を奏で来しもの

愛知県名古屋市

遠藤 雄介

褒められることの無かった人生を短歌に詠んで褒められている

愛媛県新居浜市

大賀 康男

### ＜特別賞・伊藤一彦選＞

靴ひもがほどけてるけど言わなかった 七分前から他人のあなた

群馬県前橋市

加藤 孝博

旅人の姿が見えなくなってから足跡だけの旅が始まる

大阪府岸和田市

ツキミサキ

### ＜特別賞・小島なお選＞

一つずつ言葉を紡ぐ校舎裏ガスバーナーの手順のごとく

北海道滝川市

武田 生吹

驟雨去り弓引き絞る的ちかく霞のごとく蚊柱の立つ

群馬県伊勢崎市

木村 あい子

## <入選 20 首>

悲しみは風にもあるか独り居のわが耳たぶをすすり泣き過ぐ

愛知県岡崎市

中村 佐世子

モニターと夫の顔を観てるだけ人の命の終わるというに

群馬県みなかみ町

高橋 芳子

金木犀浴びたい量に従ってあちらこちらへ急がない夜

東京都豊島区

工藤 好洋

思ひ出し笑ひと言ふのでせう零れて止まぬ朝の地下鉄

茨城県つくば市

松田 早苗

夢に立つ貴女の頬を力こめ叩いたつもりの手が宙を切る

茨城県鹿嶋市

児矢野 雅恵

藪椿手折るその手は節くれて私の髪を優しく撫でる

群馬県沼田市

小林 恵美子

盆花に父の教へし奥山の節黒仙翁われのみぞ知る

群馬県みなかみ町

小林 博子

みなかみと坪谷は深山で源流が牧水育てたふたつの故郷

宮崎県日向市

黒木 金喜

義姉は言う「チンゲン菜は最高よ」振り子のように頷く私

群馬県みなかみ町

本多 寿美枝

水紋は交わらず重なってゆく五月雨式のメール開けば

群馬県みなかみ町

山崎 杜人

牧水の本に挟まれていた紙に我が若き日の恋のうたあり

群馬県川場村

桑原 謙一

鉄色の空を西へと渡る鳥供物のごとく森へと降りり

宮崎県宮崎市

大重 知加子

世界中を手にするように歩きゆく腕いっぱいには本を抱えて

兵庫県三田市

藤野 椎月

三度目の霊柩車の助手席に座し朝焼けの色の配合思ふ

群馬県藤岡市

堀口 りつ子

ほの暗い階段登れば異世界に転生されてつづく牛鍋<sup>すきやき</sup>酒家

群馬県みなかみ町

篠原 香代

新姓のさんずい上手く書けなくしておりなす点は夫、吾子、わたし

埼玉県春日部市

藤澤 由紀

可決するまで結婚は待つという友とドリンクバーを飲み継ぐ

神奈川県横浜市

黒川 かおる

「鮭の皮なるべく食べよ」もう居ない祖父直伝の教え守る日

群馬県沼田市

水野 泉

売りに出す土地にまっかな曼殊沙華父の肉から生えたるごとく

東京都国立市

宮崎 洋子

穴道湖の深さは知らず白々と胸うちつける夏のさよなら

広島県広島市

小野 系子